

韓国の大都市とその周辺部における納骨堂 ——儀礼・追慕の形式の変化と新しい死と生の空間の生成

丁 ユリ

はじめに

朝鮮時代半ば以来近年に至るまで、韓国では埋葬（土葬）と儒礼に基づく葬・喪の方法が儒教の基本的な道德の一つである「孝」の実践として位置づけられ、死者と祖先に対する正統的な儀礼の様式とされてきた。これに対し火葬は、事故で死んだ者、未婚のまま死んだ者、自殺者、戦死者、伝染病による死者、無縁者など「非正常」な死に方をした者の死体処理における特殊な葬法として認識され、一般的な死の場面では忌避されてきた。そのため、火葬後の遺骨の処理方法においても、異常な死を迎えた死者の痕跡は残すべきではないという理由から、遺骨を粉にして山や川、海などに撒いてしまう散骨が主に行われてきた。しかし、1990年代後半からこのような状況に急激な変化が現れ始めた¹。ソウルや釜山など大都市を中心に火葬率が急速に上昇し、1991年には17.8%に過ぎなかった全国平均火葬率が、2005年にはついに埋葬率を追い抜き（52.6%）、2009年には65%にまで伸びた²。そして火葬後の遺骨の処理方法においても、従来の散骨（「自然散骨」）一辺倒から脱し、納骨堂、納骨墓など様々な形の納骨方式や樹木葬、海洋葬など新しい形の散骨方式（「施設散骨」）へと多様化しつつある³。その中でも現在、最も利用率が高いのが納骨堂である⁴。

90年代前半までの納骨堂はほとんどが公営施設で、無縁者の遺骨を安置

する陰鬱な場所として捉えられていた。また、納骨堂の需要も少なかったため施設への投資もあまり行われていなかった。しかし90年代後半以降、政府と自治体は火葬の普及のために火葬及び納骨施設に膨大な予算を投入し、これらの施設を衛生的、現代的、美的な観点から改善した。さらに、2001年には民営納骨堂の設置が許可制から申告制へと代わり、多くの宗教団体や民営業者が競って納骨堂事業に参入し始めた。このようなインフラ改善を背景に、納骨堂に対する社会的認識も大きく変わり、とくに、火葬率の増加が著しい大都市とその周辺部で、納骨堂は現在、従来の埋葬墓地（土葬式埋葬墓地）に代わる新しい墓地の形として広まりつつある。

90年代後半以降に設立された納骨堂は、公営・民営を問わず、以前の納骨堂とは画然とした違いを示す。ホテルやギャラリーを思わせるほど高級化した施設には、葬祭専門家や聖職者が常駐し、儀礼を執行・補佐している。また、インターネット、新聞、放送など様々なメディアを利用し、宣伝や情報提供に力を入れている。遺族は死者を偲ぶために、小さく狭い安置壇を、死者の写真や遺品、花や飾り物、宗教関連物品、死者へのメッセージ・カードなどで飾り、アクセスが便利のため頻繁に訪れる。それによって訪問者間のコミュニケーションが生じ、グリーフケアの効果をもたらすこともある。

韓国における従来の墓地は、「死者を埋葬し祀る場所であるのみならず、個別の祖先を表象し記憶するための装置であり、時には祖先の記念物」として理解されてきた。しかし、埋葬墓地に代わり納骨堂が都市部の新しい墓地として普及することによって、墓地の持つ意味や機能にも変化が生じているように思われる。

本論文では、近年、韓国の大都市とその周辺部で広まりつつある納骨堂に注目し、実際の事例に基づいて、まず、納骨堂という新しい墓地において、儀礼と追慕の形式がどのように変わりつつあるのかを考察する。次に、新しい墓地の形式として独自の特徴を持つ納骨堂という場が、死者の追慕や祭祀に留まらない死と生が交錯する空間として、どのような意味や機能を担いつつあるのかを示す。そして最後に、納骨堂の普及に伴って墓地の持つ意味や機能にどのような変化が生じたのかを示したい。

1. 納骨堂での儀礼・追慕の形式の変化

1. 儀礼の変化

墓地は、葬礼⁷、省墓⁸、墓祭など死者の追悼儀礼と祖先崇拜儀礼が行われる場所である。近年建てられた新しい納骨堂は、埋葬墓地と同様にこれらの儀礼が執り行われる物的空間を提供している。だが、90年代前半までの韓国の納骨堂では、このような儀礼は執り行われていなかった。それはほとんどの納骨堂が公営の火葬施設の付帯施設として設けられ、主に無縁者の遺骨を安置する場所として利用されていたためである。

埋葬墓地で行われる死者儀礼には、葬礼の一環として行われる下棺式⁹と成墳祭¹⁰、三虞祭¹¹がある。また、定期的な祖先崇拜の儀礼としては忌日や名節に行われる省墓と春か秋の決められた日に行われる墓祭がある。この他に、日頃の墓参、移葬・改葬も墓地で行われる儀礼に含めることができる。(図1、2を参照)

これに対し納骨堂での死者儀礼では、埋葬の際の下棺式と成墳祭の代わりに納骨儀式が行われる。また、従来は死者の自宅で行うことが多かった脱喪祭¹²も、近年は納骨儀式や三虞祭の直後に納骨堂で行うことが多くなっている。祖先儀礼としては、忌日や名節に省墓が行われる。納骨堂で墓祭を行う事例はまだ目にしていないが、民営納骨堂の一部を借りて家族や門中の納骨堂を造成する事例も見られたので、今後は納骨堂での墓祭の事例も徐々に出てくると思われる。一方、日頃の墓参の場合、施設へのアクセスが容易なため、忌日や名節以外にも頻繁に訪れる遺族が見られるようになり、遺族以外にも死者と様々な関係にある人々が訪れやすくなっている。移葬・改葬については、ほとんどが埋葬墓地から納骨堂に改葬する事例であるが、最近では自然葬¹⁴や散骨のために改葬する事例や、他の納骨堂から様々な理由で移葬する事例も時々見られる。(図3、4を参照)

従来、埋葬墓地で行われてきた伝統的な葬祭の仕方は、細部においては家庭あるいは地域によって少しずつ違いはあるものの、大枠は朝鮮後期に刊行



図1 埋葬時の下棺式と成墳際



図2 埋葬時の秋夕の省墓と墓の手入れ



図3 納骨時の納骨儀式



図4 納骨時の秋夕の省墓

された『四礼便覧』など儒教の儀礼書に従っており、それゆえにある程度の統一性が見られた。しかし、死者を火葬して納骨堂に安置する場合、埋葬を前提として作られた伝統的な葬祭の仕方をそのまま適用することは諸般の与件上困難である。また、代案となるような基準や規定もまだ作られていない状況であるため、納骨堂での儀礼は、それを主導する人（親族の年長者、葬祭専門家、聖職者など）の知識や見解、遺族の知識や情報、信念や宗教、あるいは納骨堂の制度的・施設の条件などによってまちまちである。したがって、ここでは納骨堂で行われる様々な儀礼の例を取り上げ、儀礼の様相と儀礼をめぐる諸般の状況を示したい。

<事例1> 納骨堂での納骨儀式的例

京畿道城南市盆唐区にある民営納骨堂の職員へのインタビュー（2010年9月）より

「(本納骨堂の) すべての職員が出迎える中、火葬した遺骨を乗せた車が到着します。遺影、遺骨、遺族と弔客の順番で納骨堂に入場します。1階の祭礼室に遺影と遺骨をしばらく保管します。遺族代表が職員とともに契約した

安置壇を確認してから、遺骨をカートに乗せて遺影、遺骨、遺族と弔客の順番で安置室へ移動します。安置壇の前で職員が「〇〇様が昇華なさいました（亡くなられました）。故人が安らかに旅立たれるよう、皆さんに最後の挨拶のお言葉をお願いします」といって、遺族と弔客がそれぞれ、「愛している」、「ありがとう」、「安らかに眠って」などと挨拶を告げます。宗教によってはお祈りをする人もいます。骨壺を綺麗に磨いて安置壇に納め、透明扉をつけてねじで留めます。これで納骨儀式は終わり、安置室から退場します。（このような納骨儀式は（本納骨堂が）独自の工夫し、（産学協力を締結した）K大学礼式産業学科のS教授からアドバイスを受けました。教授も良い儀式だ、遺族をたくさん泣かせたほうがいいと言ってくれたので、職員たちは儀式の際のコメントについて色々工夫しています。故人の年齢、性別、宗教によってコメントの内容も変わります。（故人と遺族に）宗教がある場合は、職員が安置室へ案内するまでは同じですが、仏教はお坊さんが、プロテスタントは牧師さんが、カトリックは「煉霊会¹⁵」が納骨儀式を執り行うことが多いです。神父さんが納骨堂までついてくることはあまりないです。納骨儀式にかかる時間は長い場合は1時間、短い場合は20分程度です。挨拶が長くなると、相助会社¹⁶の職員が面倒くさがることもあります」

火葬・納骨の際も葬地で何らかの死者儀礼を行うことを望む遺族のために、納骨堂の運営者や葬祭専門家は外国の先例を参考にしたり、研究者に諮問して独自の納骨儀式を作り出した。そして、火葬が急増した状況に応じて、各宗教団体も火葬の際の葬祭儀礼について新たな規定を作り、それぞれの礼法書に付け加えた。死者や遺族が特定宗教の信者である場合は、このような新しい礼法書に従って聖職者や信徒会が納骨儀式を行っている。

<事例2> 納骨堂での三虞祭と脱喪祭の例

肝臓癌で亡くなった父親（享年68歳）を京畿道安城市の民営納骨堂に安置したPさん（男性、41歳）へのインタビュー（2011年4月）より

初虞祭と再虞祭は省略し、3日目の朝、納骨堂で、三虞祭と脱喪祭を同時

に行った。Pさん、母、叔母、弟2人、妻と息子が参加した。祭祀に先駆け、まず父の安置壇に行き、職員の案内に従って透明扉を開け、布で骨壺を拭いた後、腕時計、老眼鏡、財布などの遺品と、家族写真、家族が一言ずつ書いた手紙、造花の飾りを入れた。祭祀室に遺影を置いて、供物（りんご、梨、いちご、栗、なつめ、三色ナムル、チヂミ、干し明太など）を供え、一般の祭祀と同じ順序で祭祀を行った。三虞祭と脱喪祭を兼ねていたので、祝文の内容は、インターネットで検索した内容を参考して次のようにハングルで書いた。「2009年〇月〇日、孤子〇〇（Pさんの名）はお父さんに申し上げます。歳月が流れ、お父さんが亡くなられてからもう三虞を迎えました。時代の変遷によって、本来の礼法に反することですが、時俗に従って三虞祭と脱喪祭を同時に行うことになり、昼夜を悲しみ、一時も気楽ではありません。悲しい心をもって、清潔なお酒と食べ物を供え祭祀を行うので、どうぞ美味しく召し上がってください」。漢文の祝文でなくハングルの祝文を使った理由は、意味もよく分からなくて読みにくい漢文を使うよりは、誰でも聞いてすぐ分かるハングルの祝文がいいと思ったためである。それ以来、祭祀のときはいつもハングルの祝文を使っている。父親は生前お酒が好きだったが、納骨堂では墓にお酒をかけることができないので、それが一番残念だったという。

この事例では、納骨堂で三虞祭と脱喪祭を同時に行ったり、安置壇に手紙や飾り物を入れたり、インターネット上の情報を参考にしてハングルの祝文を書いたりするなど、儀礼の新しい傾向が見られる。だが、それにも関わらず、下線部のように従来の儒礼の手順・規範をかなり意識していることが分かる。

<事例3> 秋夕の省墓の例

両親をソウル市の公営葬送施設（ソウル市立葬墓文化センター）の墳墓型納骨堂¹⁸に安置したCさん（男性、38歳）へのインタビュー（2005年9月）より



図5 墳墓型納骨堂の外部と内部

Cさんはその日、妻と娘、そして妹の家族、弟など家族7人で墓参りに来た。Cさんの家族はまず、持ってきた花束を封墳の形をした納骨堂の入口周辺に献花し、建物の中に入った。そして、地下1階にある両親の安置壇の前に集まって「お父さん、お母さん、私たちが来ました」と挨拶をした後、安置壇の外部のほこりなどを払い落とし、花飾りを新しいものに掛け替えた。縦横それぞれ30cm くらいのロッカー式安置壇の扉には四角い花の飾りが掛けられており、両親の写真と、父親の還暦に撮ったと思われる家族写真、そして、Cさんの娘の幼稚園入学式の写真が貼ってある。その後、納骨堂から出たCさんの家族は、入口周辺に設置された祭壇に、りんご、梨、ぶどう、ソンプヨン¹⁹、チヂミなどの供物を供えて祭祀を行った。墳墓型納骨堂の周辺には祭壇が4ヶ所しかなかったため、他の利用者のためにすぐ席を譲らなければならなかった。Cさんの家族は近くの木の下へ席を移し、飲福をした後、荷物をまとめて帰った。Cさんの家族が納骨堂に滞在した時間は25分程度であった。(図5を参照)

この事例からも分かるように、安置壇の手入れをし、納骨堂の内部や外部で簡単な祭祀を行うなど、納骨堂でも従来の規範的な方法を踏まえて省墓が行われている。しかし、それぞれの納骨堂の持つ物理的制約（安置・儀礼空間の狭さ、時間的制約など）や制度的制約（花束、食べ物、火気類の持ち込み禁止など）によって、従来の方法をそのまま適用することはできない。そ

のため、遺族は与えられた環境に依じて、適宜工夫しながら儀礼を実践している。また、交通の便が良い、雨風にさらされない、他の遺族と接する機会が多いなど、納骨堂ならではの長所を生かして新しい儀礼・追慕の仕方を作り出すこともあるが、それについては後述することとする。

以上の3つの事例は、儀礼の場所が埋葬墓地から納骨堂へ変わっても従来の規範を尊重し、納骨堂の持つ制約に応じて儀礼の細部の形式を様々な形に変えて実践している事例であった。だが、一方では、次の3つの事例のように従来の規範からの逸脱を示す事例もある。

<事例4> 忌日の墓参の例

京畿道高陽市にある仏教納骨堂で出会った女性へのインタビュー（2010年9月）より

黒いスーツを着た50代くらいの女性が安置室に入った。手で安置壇を撫でた後、安置室の床で2回拝礼をした。しばらく安置壇を眺めて立ち尽くした。「○○（妹の名）、ごめんね」と繰り返して言って泣いた。15分くらい経った後、安置室を出た。その後のインタビューによると、その日は妹の2周忌で、妹は若くして癌を患い、長い闘病生活の末、2008年に亡くなったという。妹は夫と離婚し、祭祀をしてくれる子供もいなかったため、仏教寺院の納骨堂に安置した。信者でもなく、費用も高いため、寺院に忌祭祀（忌日の祭祀）は頼まなかった。（図6を参照）²⁰

この事例からは、離婚して祀ってくれる子供のいない妹の2周忌に、「出嫁外人」²¹であるはずの姉が墓参りをするという、従来の儒教的規範からは極めて逸脱している傾向がうかがえる。

<事例5> 普段の墓参の例

京畿道高陽市一山東区の民営納骨堂での観察（2010年9月末の平日）より

2003年に亡くなったKさん（男性、享年34歳）の安置壇の前。父、母、

図6 妹の忌日、仏教寺院の納骨堂に墓参りに来た姉



姉が花束を持って入ってきた。母が「〇〇（息子の名）、元気だったの？ お姉さんが来たよ！」と話かけ、ハンカチで安置壇の透明扉を拭いた。中国に住んでいて久しぶりに弟のところに来た姉はすぐに涙を流した。家族はキリスト教信者のようで父が祈祷を始めた。家族皆で墓参りに来られたことへの感謝、いつも故人を守ってほしいという願いを込めた祈祷であった。3人での祈祷が終わった後も姉は1人でしばらく祈祷を続けた。母と父は安置室内の椅子に座り、姉は事務室からセロハンテープを借りてきて花束を安置壇の透明扉に付けた。

そのとき、安置室にLさん（男性、享年65）の遺族が入ってきた。Lさんは2010年に亡くなったばかりであった。両遺族は何回か会ったことがあるようで、挨拶を交わした。Lさんは仏教信者のようだったが、妻と娘はとくに宗教的な儀礼は行わず、安置壇の透明扉を拭き、持ってきた花束を付けた。Kさんの母はLさんの妻に、結婚して中国に住んでいる娘が久しぶりに帰国したので、秋夕にも来たがまた来たと話した。秋夕に、納骨堂がものすごく混んでいた話、売店で売っている花束の値段の話、中国での生活の話、故人についての話など15分くらい話をした。Kさんの遺族が先に帰り、Lさんの妻と娘は手を繋いで他の安置室を見て回ってから帰った。

この事例も事例4と同様、両親と嫁いだ姉が亡くなった子供と弟の墓参

りに来るという、従来の儒教的規範からの逸脱を示している。従来は天寿を全うし、死後祀ってくれる子供に見守られるなかで衰弱して死ぬことが「理想の死」、「正常の死」と考えられ、それに当てはまらない早死、事故死、自死、無縁死などは「非正常の死」とされ、儒教式の死者儀礼・祖先儀礼の対象にはされていない。しかし、火葬・納骨の普及とともに、「非正常の死」の場合も墓が設けられ、死者儀礼・祖先儀礼の対象となり、両親や年上の兄弟も「長幼の序」という規範に縛られることなく、また嫁いだ姉妹や娘も「出嫁外人」という規範に縛られずに、このような儀礼に参加することが多くなった。

<事例6> 埋葬墓地から納骨堂へ改葬した際の儀礼の例

夫の遺骨を先山からカトリック聖堂の納骨堂に改葬したIさん（女性、46歳）へのインタビュー（2010年8月）より

2008年強盗事件で亡くなった夫を忠清南道洪城郡にある先山に埋葬した。その後、姉からソウルの黒石洞聖堂に納骨堂が造られたと聞いた。墓参りにいくのも容易でなかったし、夫がさびしいだろうと思って、家族がいるソウルの納骨堂に改葬することを決心した。自分はカトリック信者ではなかったが、信者である姉と一緒に訪問した納骨堂はとても綺麗で静かだったので気に入った。親族を説得し辛うじて改葬を許してもらった。2009年が閏年²²だったので2009年に改葬した。納骨堂および移葬・改葬の専門業者と契約し、火葬場を予約した。当日、娘、息子、姉、姑と一緒に先山に行って墓の写真を撮った後、管轄自治団体に写真、家族証憑書類、改葬申告書を提出した。先山に戻り、酒、果物、干し明太など簡単な供物を供えて儒教式祭祀を行った。読祝も省略した略式の祭祀だった。業者が掘削機で棺を掘り出し、遺骨を収拾した。遺骨をビニール袋に入れ、再びダンボールに入れて、業者が用意した車で近くの公営火葬場に行き火葬した。納骨堂からもらってきた骨壺に入れ、ソウルに向かった。聖堂の納骨堂に到着し火葬証明書を提出した。納骨堂の管理人が遺骨をパックに入れ直し、真空処理をした。骨壺を祭壇に置いて、管理人の案内に従ってカトリック式の安置儀式を行った。あい

にく神父が留守中だった。息子が骨壺を安置壇に入れ、皆で祈りを捧げた。Iさんたちが帰った後、管理人が安置壇に木製の扉をつけ名札を貼ったという。

この事例は、夫の遺骨を先山から納骨堂へ改葬する際に、先山では簡略化したものの従来の規範に従って儒教式改葬儀礼を行ったが、その後、信者でもないのにカトリック教会の納骨堂に遺骨を安置するという逸脱を示している。

事例4、5、6に見られるこのような逸脱は、都市部の納骨堂が、従来の先山とは異なり、親族共同体や地域共同体による儒教的規制が及びにくい場であるため生じた結果なのかもしれない。

このように近年、大都市とその周辺部の納骨堂では、それぞれの条件に応じて、あるいは長所を生かして、様々な死者儀礼・祖先儀礼が行われている。そのため、納骨堂の運営者側は儀礼を行うための施設にも細心の注意を払っている。納骨堂の内部あるいは外部には祭壇と祭具が用意されており、民営納骨堂の場合、キリスト教、仏教、儒教など宗教ごとの儀礼室を別に設置しているところも多い。

そして、諸々の儀式を執行・補佐するために聖職者や葬祭専門家が常駐²³していることも一般的である。

一部の納骨堂の場合、海外に居住するなど様々な事情で墓参ができない人々のために、聖職者や葬祭専門家が献花や祭祀を代行する「葬祭代行サービス」や、直接訪問せずインターネットを使って献花や祭祀ができる「サイバー参拝サービス」も提供している。

2. 死者への追慕、死者とのコミュニケーションの変化

墓地は死者の家、死者のための安らぎの空間、死者への記憶の空間、死者と生者を繋ぐ媒介の空間である。

韓国の映画やドラマに決まって出てくるシーンに墓地のシーンがある。登

場人物は悲しいとき、うれしいとき、生活に疲れ果てたとき、慰めが必要なとき、誰かの墓を訪れる。そこは普通、家族や友達、恋人の墓である。彼らは封墳の上に伸びた雑草を取り除きながら泣いたり、墓の主にお酒やタバコを勧めながら声をかけたり、墓の脇で横になって昼寝をしたりもする。だが、数年前からそのようなシーンは納骨堂のシーンへとすっかり代わった。登場人物は死者の安置壇の前に花束を置き、透明扉を拭きながら話しかけたりする。

前述したように、かつての火葬は「非正常」な死を処理する特殊な葬法として認識されていたため、火葬後の遺骨の処理方法のほとんどが死者の痕跡を残さない「自然散骨」、つまり山、川、海に遺灰を撒いてしまう方法であった。そのため、「(故人に)会いたいとき、思い出したとき、いつでも会いにいけるし、慰めてもらえる²⁴」といったような役割と機能を墓地に求める人々は火葬を選ぶことができなかった。しかし、新しい納骨堂の普及と定着に伴ってそのような問題が解決され、現在は納骨堂特有の追慕、記憶（メモリアル）、コミュニケーションの形式が成立しつつある。

1. 安置壇の飾り

その中で最も特徴的なのは安置壇を飾ることである。初期の納骨堂や屋外納骨堂（納骨壁）の場合、安置壇は木製、金属製、石製、PCコンクリート製のロッカー式作りが多い。だが、最近は屋内納骨堂が多く、安置壇も強化ガラス製、アクリル製が増えている。安置壇を木、金属、石、PCコンクリートで作った場合も、前面は強化ガラスやアクリルなど透明な材質を使うことで内部が見えるようにしてある。安置壇は1基あたり縦横高さ30cm程度の狭い空間である。その中にはまず、死者の骨壺と位牌が安置される。そして、余った空間に色々なものが飾られる。これらの飾り物は死者に安らぎを与えるためのものと、死者を表象するためのものの、2つに大きく分けることができる。

まず、死者に安らぎを与えるためのものには、死者が身につけていた遺品（携帯電話、MP3 プレーヤー、メガネ、腕時計、財布、お金、印鑑、ダイア

リー、ペン、アクセサリ、化粧品、くし、扇子など)、死者の好物や嗜好品(タバコ、ライター、お酒、コーヒー、チョコレート、飴、香水、ゴルフのボール、サッカーや野球のユニホーム、本、CD、DVD、マイク、ゲーム機、ゲームソフト、おもちゃ、花札、宝くじなど)、宗教関連物品(十字架、聖書、イエスの絵、マリア像、ロザリオ、天使の置物、仏像、仏経、数珠、幼い僧の置物、宗教的な金言など)、一般的な飾り物(造花、可愛い置物、ビーズなど)がある。また、死者の家族、友達、恋人の写真と、家、家具、家電製品のミニアチュアを飾ることも多い。

このような行動からは、狭い空間ではあるが安置壇を幽宅(死者の家)として考え、死者に生前と似たような環境を提供し、さびしくさせず安らぎを与えようとする意図が読み取れる。

このような意図は安置壇の飾り物だけではなく、安置壇の位置を選ぶときも考慮されるようである。例えば、死者が子供の場合、同じく子供の安置壇の隣を選ぶことがあり、死者が未婚者の場合、異性の未婚者の安置壇の隣を選ぶことがある。また、死者がキリスト教信者の場合、同じキリスト教信者の隣の安置壇を選ぶことが多いという。

死者に安らぎを与えようとするこれらの飾り物は埋葬の際の副葬品と同じ脈絡で理解することができるのでないだろうか。(図7を参照)

次に、死者を表象するための飾り物には、死者の生前の写真、死者の身分やステータスを表すもの(身分証、パスポート、名札、会員証、資格証、卒業証、修了証書など)、死者の職業を表すもの(名刺、歌手のCD、俳優のDVD、作家の本、スポーツ選手の運動器具やトロフィなど)、死者の社会的貢献を表すもの(賞牌、感謝牌、勲章など)がある。(図8を参照)

従来の埋葬墓地は墓碑の形で死者の生前のステータス、個性、ライフスタイルを表すことがせいぜいだったのに比べて、新しい納骨堂の場合、様々な物品で安置壇を飾ることで、死者の生前のステータス、個性、ライフスタイルを多様な形で表すことができるようになっている。

このような飾り物は納骨堂の職員の立会のもと、年に何回か入れ替えることができる。前面が透明扉になっていない安置壇の場合でも、造花や写真、



图7 死者に安らぎを与えるための飾り物



图8 死者を表象するための飾り物



死者へのメッセージなどを貼ったりして安置壇を飾ることが多い。

2. 死者への追慕、死者とのコミュニケーションの仕方

大都市とその周辺部にある納骨堂は遠くても市内から車やバス、電車で1時間30分以内の距離に位置しているため、いつでも簡単に訪問することができる。そのため、実際毎日のように訪れる遺族もいる。

納骨堂はいくつかの部屋に分けられ、その中には飾り棚のような安置壇がいくつも並んでおり、ソファ、椅子、テーブル、祭壇、祭具などの設備が備えられている。墓参に来た人は死者の安置壇に向けて用意してきた死者の好物（食べ物、飲み物、お酒、タバコなど）を勧めながら声をかけたり、思い出にふけったり、ソファで新聞や本を読んだり、昼寝をしたりもする。このような追慕の仕方は、埋葬墓地での追慕の仕方がそのまま納骨堂に移されたものといえるが、その他に死者に話したいことを便箋や付箋に書いて安置壇に貼り付けたり、納骨堂側が用意した訪問録に死者へのメッセージを書き残したりすることもあり、後者は納骨堂ならではの独特の追慕の仕方となっている。（図9を参照）

納骨堂で死者への追慕、死者とのコミュニケーションが実際どのように行われているのか、あるお婆さんへのインタビューの事例をあげることにする。

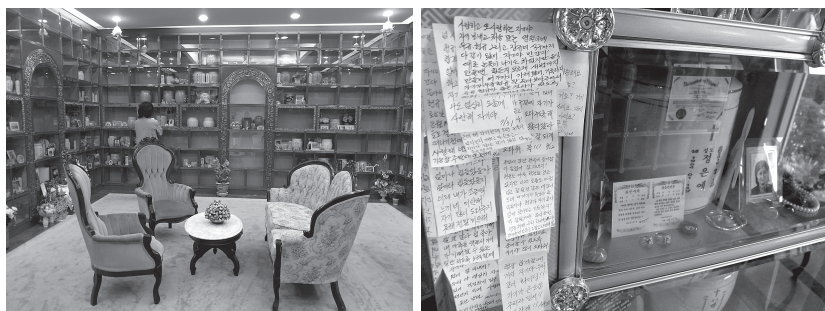


図9 納骨堂での死者とのコミュニケーション

<事例7> 毎日のように夫の墓参りに来るお婆さん

2009年に老衰で亡くなった夫を京畿道高陽市一山東区の民営納骨堂に安置したお婆さんへのインタビュー（2010年9月）より

お婆さんは夫が亡くなってから毎日のように納骨堂に来ている。その日も安置壇の透明扉をタオルで拭いて、持ってきた豆乳にストローをさして、ストローの先端を安置壇と透明扉の間の隙間に差し込んで「あなた、美味しく飲みなさい」と言っていた。夫は最後の1年間は食べ物を飲み込むことができなくなり、チューブで直接胃に流動食を注入していたという。それが心にひっかかって、お婆さんは夫が亡くなってから1年間、週2回は必ず色んな料理を作ってタクシーで運んだという。この納骨堂では、安置室に匂いのする食べ物を持ち込むのは禁じられているので、祭礼室に位牌を置いて用意してきた食べ物を供えた。供え終わった食べ物は納骨堂の職員、他の訪問者と一緒に分けて食べた。京畿道龍仁市に先山があるが、バスを3回も乗り換えてさらに山を登らなければならない。足の不自由なお婆さんのために、子供たちは家から車で30分の距離のこの納骨堂に父を安置した。「納骨堂に来ると心が楽になる。家にいるとさびしい」とお婆さんが言うと、亡くなった妻を同じ安置室に安置した中年の男性も隣で同感だと言った。男性は安置室のソファに横になって雑誌を読んでいた。退職した男性は家にいてもすることもなくさびしいので、納骨堂で時間を過ごすという。コーヒーが好きだった妻のために缶コーヒーが安置壇の下の床に置かれていた。家でも毎朝コーヒーを入れて妻の写真の前に供えるという。お婆さんとその男性は、自分たちを同



図10 毎日のように夫の墓参りに来るお婆さん

志だと語っていた。互いの悲しみを語り合いながら親しくなったという。頻繁に納骨堂に来るため、知り合いも多くなった。とくに、すでに1年以上、毎日のように来ているお婆さんは同じ安置室の死者や遺族の事情にとっても詳しくて、筆者が訊かなくても、「この人はこういう人で、こう死んで、家族は何をされていて、年間何回来ている」と説明してくれた。(図10を参照)

3. グリーフケアの場としての納骨堂

大切な人の死は遺された人々に深い悲しみと傷を与える。死者との別れの儀式である葬儀はその悲しみと傷を治癒するための最初の段階でもある。遺された人々は葬儀の過程を通じて大切な人の死を認め、別れの挨拶を告げ、悲しみを表出する。その過程を誠実にきちんと終わらせることで悲嘆を癒し、元の日常に戻ることができる。しかし、現在の韓国の葬儀は慌しい雰囲気の中で、プロの葬祭専門家によって死の確認と死体の処理という手続きを中心に行われることが多く²⁶、遺された人々は死者との別れに十分な時間を当てることができない状況である。このように、本来なら遺された人々のグリーフケアの出発点になるはずの葬儀がその機能を十分に果たしていない状況の中で、大都市とその周辺部の納骨堂はグリーフケアの場所としても機能している。

納骨堂では、事例7のお婆さんのように、死者の遺骨を安置した後もしばらくの間、毎日のように訪れる遺族や知人の姿がよく見られる。彼らは葬儀の過程で十分にできなかった死者との別れの儀式を納骨堂で補っていた。毎日のように納骨堂を訪れ、泣きながら死者に話しかけ、死者へのメッセージを書き、色々な物で安置壇を飾る。誰の視線も意識することなく、十分に時間をかけて、思う存分悲しめる。いつでも簡単に行ける距離にあり、追悼のための様々な工夫がされている納骨堂はそれが可能な空間なのである。

また、納骨堂の安置室には多数の死者の安置壇が密集しているため、事例6の2つの家族、事例7のお婆さんと中年男性のケースのように、他の死者の遺族と接する機会が非常に多い。遺族たちは大切な人を亡くした同じ悲しみを経験した「同志」となり、互いの経験、気持ち、情報などを分かち合う。このように納骨堂は死者とのコミュニケーションの場だけでなく遺族たちの

間のコミュニケーションの場でもあり、それがもたらすグリーフケアの効果を求めて頻繁に訪れる遺族もいる。

筆者はとくに子供を亡くした親のグリーフケアに納骨堂が非常に役立っていると考えている。韓国のことわざに「親を亡くせば山に葬り、子供を亡くせば胸に葬る」というものがある。韓国では子供が親より先に死ぬということを経不孝の中でも最悪の不孝として考え、多くの場合、ちゃんとした葬儀を行わず、火葬にして、遺灰を山、川、海などに散骨し、墓を作らなかった。早く忘れるのが一番という立場から、散骨の際、親を参加させず、場所も教えないことが多かった。亡くなった子供の痕跡はすべて消され、誰もその死については口にせず、まるで最初からこの世に存在しなかったように扱われた。子供を亡くした悲しみを誰にもどこにも表出することができず、胸の奥に閉まっておくしかなかった親は精神的にも肉体的にもその傷が深く長く残ることが多かった。しかし、火葬・納骨の一般化に伴い、このような慣例にも大きな変化が生じ、現在は幼い子供が死んだときも葬儀を行い、遺骨を納骨堂に安置し墓を作ることが多くなっている。かつては子供への記憶も悲しみも自分の心の中に葬るしかなかった親たちは、今は度々納骨堂を訪れ、亡くなった子供を追慕し、他の遺族たちとコミュニケーションをとり、他の安置壇の写真、遺品、飾り物、メッセージを見ながら大切な人を亡くした悲しみを共有する。いまだにグリーフケアのための相談機関や自助会が極めて少ない韓国の実情を思うと、納骨堂で行われるこのようなコミュニケーションは、子供を亡くした親のグリーフケアに大いに寄与していると考えられる。

ここでは、納骨堂が子供を亡くした親のグリーフケアにどのように働いているのかを垣間見ることができる事例を1つ紹介したい。

<事例8> 亡くした息子のための飾り物に夢中になることで悲嘆に耐える母

京畿道城南市盆唐区のある民営納骨堂での観察（2010年9月）より

京畿道城南市盆唐区のS納骨堂を見学していたところ、華麗な造花の飾り物が3つも置いてある安置室を見かけた。大きなプロマイドもあって、最

初は誰か芸能人の安置室で、飾り物はそのファンクラブが作ったものだろうと思った。しかし、そこに書いてあるメッセージを何枚か読んでいくうちに思わず涙をこぼしてしまった。「〇〇（息子の名）、馬鹿のようなお母さんは今日もまた来ちゃったよ。ここに来るしか、何もできないんだよ」、「冷たい骨壺の中のおまえを前にしても、今でも信じられない。全部夢だったらしいのに。全部嘘だったらしいのに」。それは若い一人息子を突然の事故で亡くした（と思われる）母が2ヶ月余りかけて作り上げたものだった。カードに書いてある日付を見ると、母は息子が亡くなってからほぼ毎日納骨堂を訪れているようだった。そしてその度に1枚ずつカードを書き、造花の飾り物にかけていった。そのカードが集まって、まるで造花の葉っぱのようになっていった。そのような飾り物が3つもあったのだ。母は毎日息子のところを訪れることと、安置壇を飾ること、造花の飾り物を作ること、カードを書くことで子供を亡くした悲嘆に耐えているようだった。当日、心に響いたカードの文句をいくつかカメラで撮ってきたが、後でそれを日付順に並べ替えてみると、前半に見られるショックと、神や自分に対する憤り、深い悲しみが、時間が経つにつれ、徐々に落ち着いていく様子がうかがえた。

「〇〇、元気なの？ お母さんはこんなに悲しくて辛いのに、おまえは元気にいるの？（……）お母さんもおまえのいるところに行きたい」

「おまえをここに置いて、お母さんはよく食べてもいるし、よく寝てもいる。子供に先立たれた罪深い人間がよくも生きている」

「今日は〇〇と〇〇も一緒に来たよ。うれしいでしょう？ 誰もおまえを忘れてないわ。だから安心して。悲しまないで」

「造花をもう1つ作ってきたよ。綺麗でしょう？ 大げさだと悪口を言わないでね。おまえのためにお母さんがやってあげられることはこれしかないんだから」

「〇〇、おまえが旅立ってからもう1ヶ月。カードももう30枚を超えたよ。ここに来て、おまえを見て、カードを書くのが今はお母さんの唯一の幸せなの」



図 11 亡き息子のために母が作った飾り物

「他の方々もおまえのためにたくさんのカードを書いてくださったね。おまえは幸せ者だね。昔からそうだった。おまえは誰にも可愛がられていた」

「今日、C寺で四十九日齋をやってきたの。お祖父さんもお祖母さんもここに来たがっていたけど、お祖母さんが四十九日齋のとき泣きすぎて体調が心配で帰らせたわ。お父さんとおばさんが一緒に来たの。お父さんも頑張って耐えている。お父さんに元気を与えて」

「もう泣かないと約束したのに弱い姿ばかり見せてごめんね。許して。おまえが心配しないように、強くならなきゃ！」

この事例では、最初は息子の死を認めず、悲嘆に暮れ、自分ばかり責めていた母が、徐々に周りの人にも気を配り、元気を出そうとする姿が読み取れる。納骨堂を訪れ、飾り物を作り、カードを書くという形で亡き息子と十分にコミュニケーションがとれ、また、他の遺族たちがカードに書き残した励ましのメッセージが母のグリーフケアに役立ったのではないだろうか。(図 11 を参照)